喋る犬と宇宙外交官２nd

メロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
喋る犬と宇宙外交官２ｎｄ

【Ｎコード】
Ｎ７８１０Ｔ

【作者名】
メロ

【あらすじ】
空間と空間の狭間から引っ張り出された僕。
地球人が奴隷化され、宇宙が支配されるなんていう古いＳＦチックな展開は阻止しなきゃ！
喋る犬と共に、また冒険だっ！

新章（前書き）

前作、喋る犬と宇宙外交官の続編となっております。
今作もまた短いので、サクッと読めると思います。

新章

僕は空間を漂っていた。ひたすら無の中を漂っていた。そこに時間はなかった。だから、全てが一瞬で全てが永遠だった。僕は何も感じなかったし、何も言わなかった。腹を空かせる事もなかったんだ、あのときまでは。

突然、時間が流れ出した。僕は息を吹き返した。そして、何があったのか、全てを思い出した。自分は全てを失ったのだ、と。時間が流れた事は孤独を意味していた。僕一人だけが、この空間に漂っていた。自分が死ぬまでそうだと思った。飢えで死ぬのか・・・・・・。あるいは、と思ったとき、僕は「手」に掴まれて、この空間から引っ張り出された。

「ぶはあぁっ！」

僕は、放り投げられて、真っ白な空間の上に仰向けに転がった。重力を実感して、両手で自分の体を触る。

「生きてる・・・・・・」

「そんなに不思議なのかね？」と、唐突に声が聞こえた。

この声、知ってる。

「首相・・・・・・」僕は声が聞こえた方に目を向ける。そこには紛れもなくサイザンフ星首相、バンバルジが立っていた。相変わらず、青い目。首相というだけあって貫禄がある。そして、その向こうに目を向けると、固まった犬――コルーパがいた。

「状況を理解できるかね？」

「いや、全然わかんないです」と僕は首を振った。

首相が手を差し出す。僕はその手に掴まって立ち上がった。

「状況を説明してる暇はない。まずは君の中の石の力を復活させる」

と、淡々と語る首相の横で、えっと僕は声を上げた。

「その石の力の一部を使ってコルーパをあの世から引っ張り出して欲しい」

はぁ、と僕は返事をした。だけど、どうすればいいんだろうか。と、思っていると、首相は僕の右手を掴んだ。
「君が感を取り戻している時間はない。直接あの世へ送るから、なんとかして帰ってきてくれ」と首相は早口に言った。
『なんとか』の部分が非常に気になったけど、どうやら切羽詰まった状況らしいし、半強制的にあの世へ連れて行かれるようだ。
「君は生きている人間だ。あの世にいてはいけない存在。だから、早めに帰ってきて欲しい」
「はい」もう、僕はそれしか言えなかった。
首相は、いくよ――と言うと、力を使った。すると、僕の右手はバシッという音と共に青く光った。そして、あの空間から引っ張り出されたときのような感覚と共に飛ばされた。　僕は空と草を交互にぐるぐると見ながら、投げ出された。ぼんやりと空を仰ぐ。草がクッションになってくれて、さほどは痛くなかったけど、背中が打ち付けられたときに、うって変な声が出た。
のろのろと立ち上がると、周りを見渡す。ここがあの世か・・・・・・。
僕は広大な草地の向こうに見える、山や崖、そしてピカピカと光る雷を見た。
「大変な事になったなぁ・・・・・・」

新章（後書き）

やってまいりました、２ｎｄ。
ブログの方と平行して載せていきます。

是非とも、感想よろしくお願いします。
アドバイスは、今後の執筆活動の参考にさせていただきます。

再び大戦争？

僕は、ここがあの世なのか、とぼーっとその世界を眺めていると、突然後ろから方をたたかれた。驚いて振り向くと、僕と大して身長の変わらないおじいさんがいた。おじいさんは、よぼよぼの口をゆっくりと開いた。

「あなたからは神の力を感じる」

「はい？」僕は思わず聞き返した。

すると、おじいさんは僕の右腕を掴んだ。いきなりだったから、思わずビクッと体が反応した。おじいさんは、僕の右手をじっくりと眺めると、顔を上げた。

「神の力を感じる」

おじいさんはそう繰り返すだけだった。

神の力とは、「石」の事だと思う。その力は神を超えるかもしれないけど。

「あなたは生きてますか？死んでますか？」

相変わらず、不思議な事を聞く老人だ、と僕は思った。僕は生きてるんだろうか。最終兵器との戦いであの空間へ飛ばされたんだ。死んでるのかもしれない。

「じゃあ、あなたは空野天馬じゃない」

と、老人は言うと、反対方向へ向かって歩き始めた。

「あ、待って！」

老人はゆっくりと振り向くと、僕に諭すように言った。

「あなたは天馬じゃない。なら用はありません」

「僕は空野天馬です！」と、僕は大きな声を出した。

「同姓同名の人ですかね？」と老人は眉をつり上げた。

この老人は誰を捜しているのだろうか。気がつけば老人は消えていた。

しかし、あの世に来たはいいけど、どうやってコルーパを見つけるのか。とりあえず、僕は石の使い方を思い出すために、飛んでみた。前みたいに、すっと空中に浮く事はできなかったけど、なんとか飛ぶ事だけはできた。下に降りると、目の前には老人がいた。
「あなたが天馬だったんですね」老人は、にっこりと笑うと言った。
「ええ、まあ」
老人は僕の右手を見ると言った。
「事情は分かってます。私はコルーパの魂を持っています」
「えっ」僕は思わず声を上げた。
その反応を楽しむように老人は続けた。
「私はあなたにコルーパの魂を渡すのが仕事です」老人はまだ状況がイマイチ理解できない僕に向かって微笑んだ。「私はコルーパの魂をひょんな事から手に入れました。その魂をコルーパに渡そうと思っても渡せない。コルーパはしょうがなく魂を取り戻す方法を見つけるためにどこかへ行きました。しかし、どうやってもこの身から引きはがす事のできなかった魂が、あなたの神の力に共鳴して震えています」
そういうと、老人は胸に手を当てた。すると、青い火の塊が出てきた。その魂は、僕の右手に吸い込まれるように消えていった。
「あなたはコルーパを見つけてその魂を返せばいい」老人は頭を下げた。「私が頼まれた仕事はこれで終わりです」
「あ、待って」僕は慌てて老人に声をかけた。「その仕事、誰に頼まれたんです？」
「コルーパです。奴は私が魂を手に入れてしまったときに、天馬という少年に会えと言ったんです。でも、あなたは生きている。どうやって渡させるつもりだったのやら」老人はむふふと口元を緩めると、「奴はホントにおしゃべりですね。真っ先に自分の名前を名乗りましたよ。で、延々あなたの事を話してましたよ」
老人はどこかへ消えてしまった。しかし、意外な展開だった、と僕はまだ興奮冷めやらぬ気持でいた。

僕は、ひたすら歩いた。延々と続く草原を歩き続けた。飛んだ方がいいかもしれないけど、僕は生きている人間だ。目立ってはいけない気がする。

しばらく歩くと、草原が途絶えた。代わりに、目の前は崖に変わっていた。そして、その向こうには森、地獄のような火山がある。

はぁ、とため息をついていると、後ろから、おーいと僕を呼ぶ声がした。さっきの老人の声だった。振り向くと、走ってこっちに向かってきていた。

「そこから先は、試練の世界ですよ」

「試練の世界？」

「ええ、天国にいても、まったりと暮らしたい者、修行に励む者など、たくさんいますからね。そして、天国にも未開の地というものはあります。それがこの先というわけです。だから、この草原と同じだと思ってはいけませんよ」老人が丁寧に教えてくれる。どうやらコルーパはこっちに行ったらしい。

僕は、ありがとうございますと礼を言って、崖を少しずつ降りていった。

激しい崖だった。僕は、手をかけるたび、足を確認し、足を下ろすたびに手元を確認した。そうやってようやく真ん中あたりについたときだった。それでも、まだまだ下までものすごい高さだった。

僕がおそるおそる下を見たときだった。何かが吠える音と共に、空気が揺れた。そして、ものすごい風圧が体に当たった後、何か巨大なものが僕の上の崖に叩きつけられた。

バガンという激しい音がして、岩がいくつも落ちてきた。僕は、片手を放し、その反動で円を描くように回転し、離れた岩に足をかけた。そのまま離した手で下の岩をつかみ、足ともう一方の手を離して岩をよけた。

僕は、何が起こったのかまったく分からなかった。そのまま『何か』の方を見た。思わずため息が出た。それはドラゴンだった。

再び大戦争？（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。
現在、同時に二つのものを書いていて、（アイデア浮かんで来ちゃったので＾＾；）少し、表現力が乏しい場面があると思います。
例えば、僕の場合「～た。」になりやすいとか。
アドバイス、感想の方、よろしくお願いします。

再び大戦争？

ドラゴンはギョロリと僕を睨みつけると、太い尾で岩を叩いた。岩の塊が頭上から振りそそいでくる。僕は横に移動しながらよけ、巨大な岩に手をかけると、手の力で思い切りドラゴンに向かって飛んだ。ドラゴンの頭に両手でしがみつき、そのまま片手を頭から生えている角にかけた。

ドラゴンは、大きく頭を揺さぶって僕を振り落とそうとしている。僕は、宇宙に放り投げられた。ドラゴンは尾を巧みに使い、僕をとらえた。僕はそのまま崖に叩きつけられた。体は崖に食い込み、ドラゴンの尾に押さえつけられて、身動きがとれない状態だった。僕が、尾を手でよけようとすると、ふっと尾が僕から離れた。その次の瞬間、また尾が僕をめがけて飛んでくる。とっさに、岩を掴み、後転をする容量で上に登り、尾をよけた。バガン！　という音がしたかと思うと、ドラゴンが空中で旋回し、後ろ足の爪を立てて僕の方へ突っ込んできた。僕はよける事ができずに、足に押さえつけられた。ドラゴンは空中に飛び、僕は後ろ足に押さえつけられたままドラゴンに連れて行かれた。

ドラゴンは崖から少し離れると、空中に止まった。そして、僕を離した。僕は真っ逆さまに落ちた。ドラゴンは僕を狙って炎を吹いた。僕は、石の力を使った。しょうがなかった。ここで使わないなんて自殺行為だ。

僕は石の力で炎をはじき、くるりと身を回転させてドラゴンに向かって飛んだ。大きく口を開けているドラゴンの牙に掴まり、勢いで頭の上に乗った。ドラゴンは急に動き出し、崖に向かっていった。そして、そのまま崖に体当たりをした。僕は、崖にぶつかる直前でドラゴンから離れた。

ドラゴンは崖にぶつかった。そのまま身を翻し、ドラゴンは唸った。勝てないと分かったのだろうか。すると、おもむろに空を見上

げたドラゴンは先ほどとは違う吠え方をした。
やられた！
気づくのが遅かった。振り向くと、もう一匹のドラゴンが僕の方へ迫ってきていた。ドラゴンは勢いづいて、僕に突っ込んできた。僕はよけきれなかった。左腕がドラゴンの牙にあたって裂けた。そのまま突き飛ばされた僕はもう一匹のドラゴンの尾をよける事ができなかった。崖に叩きつけられた。崖はどんどん崩れていき、僕は突き出た岩に右手でしがみついていた。
僕は崖を両足で思い切り蹴ると、バク転するようにしてドラゴンの頭上に行き、石の力で巨大な岩を吸い寄せた。そのまま岩をドラゴンの頭の上に落とした。岩はドラゴンの命中し、ドラゴンはそのまま頭から真っ逆さまに落ちていく。そして、その下にいたもう一匹のドラゴンも巻き込んで崖のしたの森に落ちた。

土埃がものすごい高さまでもくもくと上がっている。
僕は、その側にすっと降りた。まったく、試練の世界ってだけはあるな。おかげで、危うく死ぬところだった。ドラゴンのスピードについていけなかったら、僕は朝ご飯にされていたかもしれない。
あれ？
僕はふと思った。今は朝なんだろうか。
透き通った青空を見上げてみる。明るい。けど、太陽は無い。ここには時間の概念がないのだろうか。
前を見る。そこは真っ暗な森。先はまったく見えないと言ってもいいだろう。
延々と、その道を歩いた。火山がどんどん近くに見える。上を見上げると、黒い雲が渦を巻いていた。そして、カラスが鳴きながら、僕の真上を旋回していた。
どこまでも、続く暗闇とともに、僕の気分は沈んでいく。何が起こっているのか、まったくといっていいほど分からない。何故僕があの世……いま、ここにいるからこの世か。そのこの世にこなきゃ

いけないんだ。
僕は森の奥深くに行くと共に、思考のずっと奥深くに入り込んでいた。そろそろ、抜け出せなくなって、白目をむいて倒れてしまうのではないかと思われたときに、突然森が開けた。ふっと、頭の中で『知識』が光る。
僕は足を止めた。
ガラガラという音を立てて足下に転がっていた石が落ちた。
ふぅ
落ち着いて前を見る。崖の向こうには雷がこれでもかというほど轟いている。光の矢の中に、ぐつぐつと煮えたぎる火山があった。
そこの中腹から青い光が漏れている。
あそこか。
とぅ！崖から飛び降りて、見事着地した。前を見る。
火山が目の前にそびえていた。そして、崖との間に広場のような場所があった。
「……」
ドラゴンだけだと思っていた。その考えは甘かったようだ。
目の前には、真っ赤な毛に覆われた、ライオンのような、ゴリラのような、幻でも見ているのか、と思わせるくらい、ファンタジーな獣がいた。

再び大戦争？（後書き）

僕は語尾が「～た。」になりやすいんですよ。
そこをうまく改善できたらな、と思っています。

感想、アドバイスお願いします。

再び大戦争？

その獣は、鼾をかいて寝ている。でも、ただ寝ているだけなら、問題にならない。青い光が漏れている場所の目の前に寝ている。光が漏れている場所は、洞窟のようになっていて、そこから途切れることなく光が出続けている。

僕は、空中を浮遊すると、そろそろを獣の上を飛び、洞窟の前に来た。着地のさい、ジャリという音がしたけど、獣は起きていないようだった。

洞窟の奥を見ると、蜘蛛の糸の様なものが張り巡らされていて、その中心にサナギがあった。青い光はそこから発せられている。

僕は、手に取った石ころを、鋭く尖ったナイフに変形させ、丁寧にサナギを引き裂いた。その奥に部屋があって、小さな影があった。

「コルーパ」

僕は呼びかける。

影がゆっくりと振り向いた。それは、久しぶりに見るであろう、コルーパそのものだった。

「来ると思っていたよ」コルーパが満足そうな声で言う。

「ああ、それよりも、なんとかしないといけない事がある」

「何？」

「洞窟の目の前に獣がいる」

僕の奥を見たコルーパの表情が固まったのがわかった。

「赤い毛の？」

「うん」

「ゴリラみたいな？」

「うん」

「ライオンみたいな？」

「うん……」

「目が金色の？」

「……」
僕はゆっくりと振り返った。
金色の巨大な目が僕たちを見つめていた。
「なんだと……ッ」
僕はその一言しか言えなかった。
獣は洞窟をたたきつぶした。かろうじて避けた僕は、左側から、洞窟の壁を崩しながら僕に迫ってきた巨大な手に吹き飛ばされた。
コルーパが危険を察知して、吹き飛んでいく岩の上を、まるで早送りしているあのように飛んできた。僕に体当たりすると、くるんと一回転して着地した。こいつ、ホントに犬かよ。コルーパに体当たりされた僕は、獣の手にぺしゃんこにされるのを回避できた。地面に着地して、身構える。
ターゲットを仕留め損ねた獣は吠えながら、両手を地面に振り下ろした。その衝撃で地面が岩石となって、僕に迫ってくる。僕は、それらをかろうじて避けると、突然、巨大な何かに体を掴まれた。
そのまま、ぐいっと引き寄せられた。獣に捕まってしまった僕は、身動きがとれない。金色の目に睨まれている。
僕は餌じゃないぞ。
獣が手に力を込めたのか、体がミシミシ音を立てている。息ができない。苦しい。石の力を使おうにも、足も手も掴まれていて、動かす事ができない。
「うおっ……コルーパ……ッ」
そのとき、獣が僕を握りしめたまま、コルーパに向かって両腕を振り下ろした。地面に叩きつけられた僕。コルーパはかろうじて避けるも、衝撃波に吹き飛ばされた。
僕はその隙を見逃さなかった、地面に打ち付けられた瞬間に岩を針のように鋭くした。針は、獣の腕に突き刺さる。
獣はうなり声を上げると、僕を放した。
「コルーパ大丈夫か！」
息を荒げながら僕は吹き飛ばされたコルーパに聞いた。

「ああ、なんとか、な」
よたよたとコルーパが寄ってくる。
獣は、餌に抵抗されて、相当頭に来ているらしい。目が金色から赤色に変わっていた。
「正面から太刀打ちはできないな」
「ドラゴンよりましさ」僕は言う。
獣が、息を荒げながら突進してきた。
「やれるかい、天馬」
「なんとかな。だいぶ落ち着いた」
深呼吸する。すーッはーッ。
身構えた。獣は腕を振り上げ、飛びかかってくる。僕は、一瞬後ろに飛び退いて、獣が空振りしたところで、獣に飛びかかった。背中に乗り、前回り風に背中の上を転がると、獣の後ろに立った。そして、コルーパは獣に威嚇している。
獣が、僕の方に向く事はない。
僕は、スカスカになった、獣の腹を目がけて、また針を作り出した。ただ、誤算があった。それは
獣の腹が頑丈だった事。
あたった衝撃で獣が気づいちゃったって事。
獣は、僕の方を振り向くと同時に、巨大な手で僕を吹き飛ばした。火山に向かって、突っ込んだ。ガラガラという音を立てて、岩が崩れる。
僕はそこから煮えたぎる溶岩を見た。
獣がこちらに向かってくる。僕は、くるりと体を軸にして回って避けた。が、思惑通りに行かなかった、獣は僕の少し前で急に一歩分後ろに飛び退き、僕に向かってまた突っ込んできた。
獣は、巨大な手で体を火山の斜面に押しつけてきた。また身動きがとれなくなった。でも、幸い、地面にはついている。僕は、地面を棒状にして、獣を中に突き飛ばした。空中に浮いた獣をオーバーヘッドキックの要領で溶岩の中に蹴り入れた。

苦しもがく獣の姿を見る気は毛頭無い。僕は、斜面を滑るようにして降りると、コルーパの元へ行った。

再び大戦争？（後書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。

戦闘シーンの「～た」は改善できなくて。。。

感想、アドバイスお願いします。

再び大戦争？

「以外とあっさりだったな」コルーパがニッと笑って言う。
「戦いなんてそういうものさ」
そうだな、コルーパが素っ気なく答える。
「お前の魂、渡しとくよ」
「ああ」
僕の右手から青い炎の塊がコルーパに向かって飛んだ。
「ちゃんと、戻ったようだ」コルーパが舌を出していった。
「そもそも、魂をなんで切り離した？」
「護身用だよ。こんなところで死んだら意味がないだろ」
ふーん。
「まあいいや、帰ろう」
石の力を使うと、まばゆい光と共に、ゆらゆらとした、環が目の前に出てきた。僕とコルーパは光の中をくぐった。

光の向こうは儀式の間だった。僕とコルーパが光からでると、周りを見回した。
「えッ？」
首相が二人、向かい合っていた。まったく状況が読めない。
「天馬、伏せろッ！」コルーパが叫ぶ。
と、同時に片方の首相の足下から黒い液体が飛び出して、僕めがけて飛んできた。反射的に伏せてよけると、僕の上からコルーパが飛び出して、黒い液体に向かった。コルーパは燃えていた。そのまま水に体当たりすると、水は形を変えて、よけてそのまま儀式の間から消えた。
「おい、コルーパ大丈夫か？」と僕は燃えていたコルーパが心配になって聞いた。
「いや、大丈夫」

ふと見ると、コルーパは燃えてなかった。どういうことだろうか。
「以前、俺には喋るという能力があると言ったはずだ。実は、他にも能力がある。物質なら何にでもその形に変える事ができる能力だ」とコルーパは言った。
「で？　さっきの奴は何なんだ？」
コルーパは首相と顔を見合わせた。首相が頷くと、コルーパが話し始めた。
「天馬が、空間と空間の狭間からでたとき、そこにいたのは首相じゃないんだ。さっき、天馬の事を襲った奴だ」コルーパは驚く僕をよそに続ける。「奴は俺たち三人をまとめて殺そうとしてたんだ」
「どういうことだ？　僕は空間と空間の狭間にいるし、コルーパはあの世だ。首相だけ襲えばそれだけリスクが少ない」
「天馬、それは違う。たとえ、違う次元、空間にいたとしても、それは『死』ではない。死を受け入れ、死んだわけではないんだ。だから、生きてる。生きてれば、この次元――この世にでてくることができるから、意味がないんだ。ほら、俺は殺される事以外で死なないって言ったろ？　だから、あの世に魂がついてきた」
「じゃあ、なんでコルーパはあの世に行ったんだ？」
だんだんこんがらがってきた。でも、知りたい事もいっぱいあって、不完全燃焼だ。
「それは、私から説明します」首相が言った。「コルーパには奴から身を守るために、安全策としてあの世に行ってもらったんです」
「安全策？」僕が聞く。「最終兵器が消え去った今、何の危険があると？」
「全宇宙の星が民主制に移行になったはずが、軍事に特化した星が未だに地球を狙ってるんです。それは、『ドグラクス』。彼らは、今回の宇宙戦争の黒幕だったのです。彼らは、反政府軍を煽って、兵器を無償で譲渡し、この戦争へと導いた。が、作戦は失敗し、念のために送り込んだ最終兵器も消滅した」首相はふうと息をついて続けた。「そして、彼らは新たな策を考えた」

首相は淡々と話しているけど、まったく分からない。でも、疑問は残った。
「どうしてドグラクスは地球に固執するんです？」
待ってましたとばかりにコルーパが口を開いた。「前にも話したと思うが、地球は資源が豊富だ。宇宙の中でもかなり豊かな星なんだ。加えてドグラクスは資源に乏しい。しかも、軍事国家だから、兵器開発は必要不可欠。彼らは、兵器を開発し、売って、その金で輸入してたんだ。彼らは崖っぷちの状態で、最終兵器を超える火力を持った新たな生物兵器を生み出した」
「それが、さっき我々を襲った奴、ドリグランです」首相が言う。
「奴が敵ならば、今の天馬さんの力では太刀打ちできない」
「石の力を使っても？」僕は聞いた。
「使ってもです」
絶望だった。今度こそ地球は終わるのか。
コルーパを見る。緊迫した状況だが、それなりの余裕が顔に出ている。
「だが――」コルーパが口を開く。「解決策がない訳じゃない」
首相が頷いて後を続けた。
「奴は今地球に潜伏中。しかし、所詮兵器。命令に従っているだけ。そこで、天馬さんに新たな仕事を頼みたいのです」
「新たな仕事？」
「ええ。命令を出している人物――すなわち、ドグラクスの最高司令官、タウチーを暗殺する事」
暗殺・・・・・・暗殺って、人殺し？　それは、犯罪だし、僕もしたくない。ふと首相の顔を伺う。さすがに、やるせない表情だった。
「非常に言いにくい事ですが・・・・・・天馬さんは多数のドグラクス星人を殺している」
「えっ」
それは驚愕の事実だった。僕はそんなことをしていない。

「最終兵器が責めてきたとき、軍艦も一緒だった。その軍艦やＵＦＯはドグラクス星が出した援軍。天馬さんは見事に破壊していったけれども、中のドグラクス星人は死んだ・・・・・。天馬さんはもう、殺戮者なのです」

再び大戦争？（後書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。

感想、アドバイスお願いします。

再び大戦争？

頭が真っ白だった。僕は犯罪者なのか？　地球を救ったからと言って、許されるのか？　このまま逃げだそうか。逃げて、どこかへ消えてしまおうか。

「うわあぁ！」

意味もなく叫んだ。どうすればいいんだろう。僕は頭を抱えて叫んだ。

「しっかりしろ！」コルーパが怒鳴った。

僕は、その声に驚いて、ビクンと体を震わせた。さっきから震えが止まらない。

「よく考えろ。お前が一人を殺さなければ、何十億人という地球人が死ぬんだ。余計な死人を出すのか、それとも、自分は犯罪者になりたくないと偽善者ぶって何十億の人を見殺しにするのか。その未発達な頭でよく考えやがれ！」

コルーパの怒鳴り声が儀式の間に響いた。

僕はその声に弾かれるように頭を上げた。もう、震えはない。僕は覚悟を決めた。――犠牲者を増やさない。

「決めたよ」

「おう」コルーパが笑う。

「さて、今から原石を取りに行きます」首相が言った。

「原石？」

コルーパが僕を見上げた。「神の涙の原石だよ。天馬の右手にある石さ」

「へぇ。で、それはどこに？」

コルーパがニッと笑った。

「天馬のおじいちゃんの家。静岡の天夢の家だ」

再び大戦争？（後書き）

今回短めです。
予約投稿にすると、ブログの方より先に話が進んでしまうので、更新が不定期です。（まあどちらでもいいのですが

この辺、書くのがめんどいなーって思ってたときです。
この辺りから、別の話を考えてしまっていたので、文章がめちゃくちゃです。

感想、アドバイスお願いします。

破壊と裏切り

ようやく心の中のもやもやしていたものが解けてきた。あの時、おじいちゃんが書斎に入った事を怒った理由はそれかも知れない。僕はにわかに合点した。

ようやくおじいちゃんに会える。そう思うと、ウズウズする。

僕たちは首相のワープ機器で一気に静岡に飛んだ。そこから、おじいちゃんの家に歩いて行った。

僕はさっきから気になっていた事を聞いた。

「ところで、何でおじいちゃんが原石を持ってるんだ？」

「原石は代々外交官から外交官へ受け継がれてきた。本当は君のところに届けられるはずだった」

コルーパが歩きながら言う。

「ところが天馬さんが空間と空間の狭間に入り込んでしまった」首相が続きを引き継いで言った。「ドリグランが開発されなければ天馬さんは空間と空間の狭間にいるはずでした。現在の天馬さんの石では力が足りない」

「それでも太刀打ちできないのでは？」

「ええ。首謀者であるタウチーを倒す事ができれば、地球に平和は戻る」

こんなことをしている場合じゃないのではないか。ドリグランが今何をしでかしているのかわからない。急いで原石を手に入れないと。

僕たちはようやくおじいちゃんの家の前についた。僕はチャイムを鳴らす。

「ピンポーン」

待つ事数十秒。おじいちゃんは出てこない。留守なのかな。

「ピンポンピンポン」

三度ならしてようやく出てきた。ドアがゆっくりと開いて、比較

的小柄なおじいちゃんがすっと出てくる。懐かしい顔だ。僕の顔を確認すると、安堵のため息をついた。
「でれたんじゃな」
「うん、まあね」どうやら、事の成り行きを知っているおじいちゃんに説明は無用のようだった。「原石を取りに来たんだ」
おじいちゃんの顔がいつになく真剣になる。
「さあさあ入って」
おじいちゃんは僕たちを書斎へ案内した。おじいちゃんの家をキョロキョロと見る。何年ぶりだろう。書斎に入る。ここも何年ぶりに入るんだろう。ここのことはよく覚えている。忘れるわけがなかった。
「ここです」
おじいちゃんが右手を机にかざす。すると、右手が青く光り、机が真っ二つに割れた。すると、割れたところには黒い箱があった。おじいちゃんは左の掌を上にすると、石の力を使って左手から鍵を取り出した。
「原石はとても危険ですから」
おじいちゃんはそういって、黒い箱を開けた。
「ボンッ」
大きめの音をたてて、箱は勢いよく開いた。それとともに、青い光が書斎を包んだ。箱の底からふわりふわりと浮き上がってきたものは、ゴツゴツとした青い石だった。僕が宇宙外交官になったときにもらった石の十倍はある。深い青色のその奥底で光る独特の光沢は、吸い込まれそうな淡い色合いを醸し出していた。
おじいちゃんは空中に浮かぶ石を優しく両手で取った。おじいちゃんが石を僕に渡そうとしたときだった。
何かが落ちてくるヒュルルルーという音と共に、建物が崩れる音がした。それがおじいちゃんの家で起きた事だと気がついたのは、木の破片が僕の頬をかすり、血が垂れた時だった。ガラガラという音を立てて、おじいちゃんの家の屋根が崩れている。

僕の目の前には煙を上げてたたずんでいる一人の男。パーカーを着て、フードをかぶっている。顔は見フードのせいで見る事ができない。おじいちゃんは尻もちをついている。首相とコルーパは吹き飛ばされたのか姿が見えない。

破壊と裏切り（後書き）

最近、書く意欲がなくなったので、書き溜が減ってます。
ブログも更新してないので
このまま気にせずに、書き溜が減るまで一気に更新していきます。

破壊と裏切り？

「おじいちゃん、石は？」
僕はなるたけ落ち着いて聞く。おじいちゃんは聞かれてはっとしたのか、首を捻りながら周りを見る。
「ない！」おじいちゃんが叫ぶ。
僕は、目の前の男が石を握っているのを見た。
「ドリグランか？」
僕は目の前の男に聞く。
男は僕の質問に答えずに、駆けだした。僕を左手で突き飛ばし、家の壁を体当たりで突き破って外に出た。僕は両手で受け身をとり、くるりと後ろ向きに回転して地面に足をつけた。
「コルーパ！　まずい事になった。奴が外に出た！」
「分かった。天馬はすぐに追いかけろ！」コルーパはもぞもぞと起き上がると叫んだ。「天夢は危ないからここにいろ！」
僕は、ドリグランが開けた穴を通って、追いかけた。ふと後ろを見ると、コルーパと首相もついてきている。前に視線を戻すと、ドリグランは加速して視界から消えた。
「見失ったぞ！」
奴が大都市にいったら、被害は甚大になる。早く食い止めなければ。
「都市部で奴の生命反応を確認した。急げ、天馬」
わかったと頷いて、僕は加速して、ドリグランを追いかけた。
瞬時に、ビルが建ち並ぶ都市部に到着した。僕はてっきり、ドリグランが石の力で街を破壊しているのかと思っていた。実際は、これから地球が滅ぼされるかも知れない恐怖が微塵も感じられないほど平穏だった。
コルーパと首相が遅れてやってきた。
「どういうことだ？」

僕と同じ事を思っていたのか、コルーパが聞いてくる。
「わからない」
「奴の生命反応はここから出ているな」
変装しているのかも。と僕は思った。来るときは普通の若い男だった。
「とりあえず、奴は地球の生活に慣れてない。ボロがでて来るはずだ。怪しい奴は見張るべきだな」
コルーパの言葉に僕は頷いた。
ゆっくりと人気のない路地裏に降り立った。しかし、都市部とだけあって、凄い人混みだ。この中から探すのはかなり骨が折れる作業だろう。
コルーパと首相も路地裏に着地した。首相はもう既に、どこにでもいるような若者の姿に変身していた。
「よし、行こう」
僕らは大通りに飛び出だした。

破壊と裏切り？（後書き）

どんどん更新していきますよーっ

破壊と裏切り？

人混みを流れに沿って歩いて行く。ケータイをいじっているもの、音楽を聴いているもの、カップル、フラフラと歩いている老人、ベービーカーを押している主婦。いろいろな人がいるけど、ドリグランらしきものは見当たらない。一方で全員がそうではないのかとも思えてくる。と思っていた矢先、すごく怪しい人物を見つけた。

帽子を深くかぶり、人目を避けるようにして歩いている。ポケットに手を入れている。やけにポケットが膨らんでいるから、そこに何かが入っているのだろう。石だろうか。

僕は近づいて声をかけた。

「あのう」

その男はびくりと体を震わせて、おそるおそる僕の方を見た。

「なんだ」男はつぶやいた。「ここは危ないからあっちいけ、シッシッ」

猫を追い払うように僕は追い払われた。でも、日本語を喋っていたから、たぶんドリグランじゃないだろう。たぶん。

男は、三人くらいの黒ずくめの男に絡まれていた。そのまま、薄暗い路地に入っていった。あれも、いろいろと犯罪の臭いがするけど、それよりも重大な事がここで起こっているのだ。かまってはいられないだろう。

その男の方を見ながら歩いていたため、前方に注意が行かなかった。僕はこっちに歩いてきた人に正面からぶつかった。それと同時にカランと何かが音を立てた。

「すいません」

僕は謝って、顔を上げた。それはどこにでもいそうな中年だった。無言で立ち上がると、何かを探している。僕はその中年男の手が伸びる先を見た。そこにはゴツゴツとした青い石があった。

「あ」

僕が思わずつぶやいたと同時に、中年男は素早く石に駆け寄り、たたき割った。破片が周りに飛び散り、半分くらいの大きさの破片が僕の処に飛んできた。それを掴むと、ポケットに入れながらドリグランに近づいた。中年男は前屈みになった状態から、足を振り上げて僕を上に蹴り飛ばした。

周りから、悲鳴が聞こえる。それと同時に「危ないから非難して！」という声も聞こえる。コルーパと首相だろうか。

空中で、ドリグランがジャンプし、向かいのビルに突っ込むのを見た。パリンパリンとガラスが割れ、飛び散る音と鉄筋が歪む音が聞こえる。ドリグランは、ビルでキュッと方向を変えると、落下状態にある僕に向かってきた。ドリグランは僕の胸ぐらを掴むと、そのまま地面に僕を叩きつけた。

ズン！　という鈍い音が響いた。一瞬遅れて、地面が大きくへこみ、ビルが倒れ始めた。悲鳴が大きくなり、いよいよ一大事だ。ドリグランは僕の胸ぐらを離すと、消えた。ふと上を見ると、ビルが僕にのしかかるように倒れてきていた。

僕は起き上がると、走り出した。鉄筋が歪み、すれる音と共にビルは崩れた。

ガラガラという音と砂煙を上げているビルを見る。そこをジャリジャリと歩く音が聞こえた。砂煙の中から出てきたのはドリグランだ。

奴は、一瞬にして僕に駆け寄り、僕を殴った。僕は後方に吹っ飛んだ。そのままビルのガラス窓を突き破ってオフィスに転がった。「逃げて！」僕は驚きと恐怖で固まってしまっている人たちに言った。「早く！」

みんながオフィスから逃げていったときだった。僕が割ってしまった窓からドリグランが入ってきた。向かい合って、しばらくの沈黙が流れた。パリッとガラスの破片が割れる音がした瞬間、僕はドリグランに向かって走り出した。ドリグランは手を鎌に変形させて振り下ろした。ほぼ同時にスライディングしてドリグランの股をく

ぐり抜け、勢いよく窓から飛び出した。そのまま、真上に向かって飛んだ。下からはものすごい勢いで黒い液体が向かってきていた。
液体はあっという間に追いつくと、僕の足を掴んだ。瞬時に中年男の姿に戻ると、僕を思いきり投げ飛ばした。抵抗する間も無く投げ飛ばされた僕は、向かいのビルの屋上に背中から突っ込んだ。
マット運動の後ろ回りのようにして足をつけると、コンクリートに食い込んだ。そのまま止まると、向かってくるドリグランの方へ飛んだ。
伸びてくる手を避けると、無防備になった背中目がけて両手を振り下ろした。ヒュウーと風を切って落下する音を立て、アスファルトの道路に衝突した。ものすごい砂煙が立ち上り、アスファルトの欠片が周囲に飛び散った。ビルのガラスが割れ、アスファルトがくぼんだ影響で電信棒が倒れ、電線が切れ、街路樹に絡みついて発火した。
ドリグランが起き上がると同時に、思わぬ方向から攻撃を受けた。下ばかりに気を取られていたせいで、周りに注意が向かなかった。いきなり右頬に激痛が走り、そのまま落下した。下のドリグランが近づいてくると思ったら違った。路地裏から黒い液体や、若者、老人、主婦、ＯＬなどと様々な人たちが出てきた。逃げて！　って言おうとしたその時だった。その人達が僕に向かって飛び上がったのだ。
一瞬の出来事だった。気がついたら道路の真ん中で、大量のドリグランに羽交い締めにされていた。燃えさかるビルや、倒壊しているビル。被害は建物だけじゃない。道路の真ん中で倒れている人や、遠くで頭を抑えている人や血がしたたり落ちる足を押さえている人もいる。負けてしまったのだ。
コルーパはドリグランの一人に拘束されていた。でも、首相が見当たらない。
「首相は？」僕はコルーパに訊ねた。
すると、コルーパはゆっくりと首を横に振った。

「死んでしまったのか……」
「そうじゃない」コルーパはまた首を振った。「俺たちは騙されていたんだ」
騙されていた？　どういうことだ？

破壊と裏切り？（後書き）

戦闘時の表現方法が難しいです。

破壊と裏切り？

「おい、悪ふざけは――」
「お疲れ様です」
ドリグランの塊の向こうから声がした。首相の声だった。首相はドリグランの塊をかき分けて、僕とコルーパの前に来た。
首相はおもむろに青い石を取り出すと、咳払いを一つして、町中、否、世界中に響き渡るのではないかというほど通る声で言った。
「地球人よ。よく聞け。地球は我々が占拠した！」
「なに！」
遠くの群衆でどよめきが起きた。
首相が手をかざすと、モニターが現れた。どうやら世界中の人が聞いているらしい。世界各地の画面が移るが、どこの場所でもモニターを見ている。そして、破壊された町、怪我をしている人々が移る。ホワイトハウスが移った。もはや、原型をとどめていなく、半分に崩れ、燃えさかる炎が上がっていた。国会議事堂も同じような状況だった。
次に見た事のない巨大な建物が移った。が、その建物も煙を上げている。東京ドームのようだが、それとは比べものにならないくらいの大きさだ。
「世界政府だ」コルーパが言った。「天馬が空間と空間の狭間に行っている間にできたんだ。あそこで、宇宙関連の会議をしていた。地上五階建て、地下四階建てで核爆弾が真上に落ちても何ら影響が出ないシェルターも完備されている。そして、サイザンフ星の提案で防護シールドが張られていた」
「我々が作ったのだ。解除する事など容易い事よ」
首相が不適に笑った。
「見たか、地球人どもよ。世界政府は陥落し、我々の手の中だ。直にドグラクスの艦隊がやってくる。我々サイザンフ星は民主制度を

破棄し、独裁制へ移行する。そして、ドグラクスと併合し、『ナハルタ帝国』として生まれ変わるのだ！」
「チッ」コルーパが舌打ちする。「ナハルタっていえば地球が一万年前、氷河期になってしまった元凶だ。奴が銀河をナハルタ帝国として一つにまとめ、資源豊富な地球を支配するようにサイザンフ星をそそのかした奴だ！」
最悪の展開だ。その悪夢が蘇るのか。
「もう地球を凍らしたりせんよ。我々は資源が欲しい。その資源で兵器を整え、誰も文句が言えない絶対的権力をもった帝国にするのだ！」首相、いや、バンバルジが拳を握りしめて言う。「そのために地球人には奴隷となってもらう」
そいつらはマザーシップに連れていって石を取り出し破壊しろ、とバンバルジはドリグランに命令した。僕らはドリグランに連れられて小さな宇宙船に乗った。乗るときに、
「やっとだ。やっと」
バンバルジが漏らした声を聞いた。

破壊と裏切り？（後書き）

少し短めです。
この辺から終わりに近づいていきます。
２ｎｄはやっぱ短いです。

破壊と裏切り？

宇宙船は瞬時に宇宙空間に飛び出すと、そのまま巨大な船に連結した。僕らはそのまま巨大な宇宙船に移され、牢屋に入れられた。

「壊そうとしたって無駄だからな。こいつは、石の力を使ってもびくともしない」

門番が自慢げに言う。僕らはそれを聞き流して話し合った。

「つまりどういうことなんだ？」

「サイザンフ星人はこれを待っていたんだ。彼らは地球を我がものにしたがっていた。だから、最終兵器を送り込んだ」

「ちょっと待って」僕はコルーパの顔の前に手を出してストップをかけた。「最終兵器ってかなり前からあったよね。それこそ一万年前から。しかも、最終兵器を送り込んだのは反政府軍だ」

「ああ、そうだ」コルーパは頷く。「一万年前は帝国時代だ。地球を奪っても誰も文句は言わない。だが、天馬が宇宙外交官に任命されたときはどうだった？　そのときサイザンフ星が地球を支配したら他の星からの避難が集中するだろう。そうなったら、帝国を作り上げる前に滅んでしまう。だから、反政府軍という形でドグラクス星人と最終兵器を送り込んだ。地球は勝った。これも計画の一部だった。地球を巡る見えない火花が散っていた宇宙での、まさに冷戦状態が解けたんだ。戦う理由がなくなった星達は兵器を捨て、平和を愛す民主制へと移行したわけだ。しかし、ドグラクスは以前独裁制だった。彼らの星には何ら資源がない。原料を得ては兵器を作り、それを売り、またその収入で原料を買う。ということを続けてきたから、そう簡単には民主制へ移行はできない。それを見越していたサイザンフ星人は密かに帝国締結を結び、ドリグランを作らせたんだ。最終兵器を越えた兵器が大量に地球に攻め込み、一瞬にして占拠したのをみた他の星は、武力では抵抗できないことが分かったんだ。そのうち、サイザンフ星から呼び出しがかかる」

長い長い説明を聞いた後、ゴクンと生唾を飲んだ僕は、聞いた。
「もちろん、地球も呼び出されるんだよな？」
「いや、それはない」コルーパはきっぱりと言った。「地球は、もうすでにナハルタ帝国のものだ。世界政府が陥落した今、代表者がいない」
それは地球が死の宣告を受けた瞬間だった。
「コルーパはどうしてそんな事を知っている？　知ってたなら、未然に防げたはずだろ？」
「記憶に厳重なロックがかかっていた。それこそ、宇宙最高のハッカーやＡＩが千年かけても解ける事ができないような、厳重ロックが」
「なんでそのロックが解けた？」
「バンバルジの提案で天国にいったときだ。このときに、帝国を作り上げたのだろうが……。一度魂が抜かれ、肉体と精神だけの状態の時、いわば仮死状態から魂が入った事により、肉体と精神と魂が一気につながった。その衝撃でロックが解けてしまったんだ」
「でも、そこからでも何とでもできたはずだ」
僕は食い下がる。
「いや、もう手遅れだ。ドリグランができた瞬間から全てが手遅れだった。何故、俺が天国にいっていた短期間であんな生物兵器ができたのかもわかったんだ」
コルーパの顔に影が落ちた。僕が、なんで？　と聞くと、声を低くして言った。
「俺が、ドリグラン初号機だったんだ」
新たなる新事実の暴露の衝撃で、僕の口はポカンと開いた。
「で、でもコルーパは人を襲ったりしないだろ？」
「ああ。そういうプログラミングは一切組み込まれていない。だが、俺の設計図があったから奴も短期間で作り上げられた」
「コルーパで仲間でよかったよ。いや、ほんとに」
「ありがとう。しかし、問題は地球が会議に出る事ができない以上、

この状況を打破できない。もっとも、ドリグランをなんとかする必要があるが」
そうだなぁ。僕は腕を組んだ。薄暗い牢での考え事はできない。集中力が保たない。代表者、代表者……。
ああ！
「いるじゃないか、代表者！　ここに！」

破壊と裏切り？（後書き）

どんどん更新。
どんどん更新。

破壊と裏切り？

「いるじゃないか、代表者！　ここに！」
僕は、指で自分を指した。
ああ！　とコルーパも思わず大声になる。
「うるさいぞお前達」門番が喋り続ける僕たちを怒鳴った。「お呼びがかかったぞ」
僕らは牢から連れ出され、一人の真っ黒なドリグランに手錠でつながれてひたすら歩かされた。さまざまな機器を片目で見ながら、イスとケースがある部屋にたどり着いた。小さな部屋で、大きなモニターが三つ。僕はイスに座らされ、コルーパはケースに入れられた。
ドリグランが僕の方をガッチリと掴んで離さない。手も自動で施錠された。石の力を使う。けれども何の変化もない。
「無駄だよ」いかにも博士といった風貌のサイザンフ星人が言う。
「石の力では壊せない」
僕はコルーパを見る。コルーパは軽く頷くと言った。
「ならこれはどうだ！」
コルーパは白い液体になると、ケースから出てきた。犬の姿に戻り、跳ねるようにサイザンフ星人がいじっていた機械の上に乗り、するすると機械に吸い込まれるように入った。その瞬間、僕の手の施錠が外れた。
「ナイス、コルーパ！」
僕はドリグランを蹴り飛ばすと、ポケットから原石の欠片を取り出した。それを右手で握りつぶすと、石が体の中にすっと入ってきた。力がみなぎっている。
ドリグランが起き上がると同時に僕に向かってきた。屈んで避け、アッパーの様に拳を上に向かって突き上げる形で殴った。ドリグランは、天井に張り巡らされた精密機械の様なものにぶつかった。機

械はバチバチと火花を上げ、ドリグランの体がブルブルと震えた。そのまま床に落ちて動かなくなった。
「一時的に機能が停止してるだけだ」コルーパが言った。「急ごう。タウチーのところに行けば何か分かるかも知れない」
僕は頷くと、サイザンフ星人の元へ瞬時に移動し、胸ぐらを掴んだ。
「タウチーはどこにいる」
「ち、中央制御室だ」
サイザンフ星人が震えながら答えた。
「それはどこだ」
「し、知らないね」
そういうと、サイザンフ星人は手元にあった赤いボタンを押した。部屋が赤く点滅し始め、緊急音が鳴り始めた。
「急げ！」
コルーパが大声で言いながら走り出した。僕はサイザンフ星人を離すと、部屋の外に飛び出した。外では、大量のサイザンフ星人が待ち構えていた。
「ターゲットを確認。拘束せよ」中央にいたサイザンフ星人が銃を構える。
僕は走りながら石の力を使って、サイザンフ星人の軍勢を吹き飛ばした。
「中央制御室はどこなんだ！」
僕は叫ぶ。
「知るか、そんなこと！」
コルーパが鮮やかにサイザンフ星人を飛び越え、廊下を走った。
サイザンフ星人を撒きながらたどり着いた先は二人の門番がいる部屋だった。
「怪しいな」コルーパが言う。
「うん、怪しい」
僕らは静かに近寄ると、首の後ろをどんと手のひらで殴った。二

人の門番は、音もなく倒れた。
「よし、入ろう」
ドアの手前にあったボタンを押す。ドアが開いて、薄暗い部屋が見えた。僕らはその部屋に入ると、石の力で明かりをつけた。
そこには、椅子に座った青い顔をした魚みたいな宇宙人がいた。そのわきにドリグランが二体いる。ドリグランは、僕らを見ると、戦闘態勢にはいった。
「お前達は……」
魚みたいな顔をした宇宙人がいいかけたその時、片方のドリグランが黒い液体になって、僕に襲いかかってきた。コルーパが僕の前に飛び出し、白い液体になってドリグランとぶつかり合った。僕は、屈んでコルーパ達の下をくぐり、スライディングしてドリグランの足を蹴った。ドリグランは、右足で僕の蹴りを受け止めると、左足で僕を蹴り飛ばした。
天井まで体が浮いた僕は、天井に手をつき、くるりと反対向きになってドリグランに向かって拳を固めた。石の力を使って拳の中から炎を作り出し、ドリグランに向かって投げつけた。炎に包まれたドリグランは苦しもがいて倒れ込んだ。
コルーパは、依然液体となってドリグランと格闘していた。液体のまま、床に大きな針を作り出したり、燃えたりして激しい戦いが続けられていた。もの凄い速さで液体同士の戦いが繰り広げられている。
僕は燃えていたドリグランを見た。体が焦げて煙を上げている。が、みるみるうちに焦げ跡が消えて、元の姿に戻った。
「コルーパどうすればいいんだ！」
「わからない！」
素早く移動、攻撃を繰り返す液体から返事が返ってきた。
「奴の弱点は、電気だ！」急に魚みたいな顔をした宇宙人が言った。
「一時的に機能が停止する！」
わかったと僕は頷いて、飛び上がってくるドリグランに向かって

行った。ドリグランの背中に手をついて、前回りをする形でついでに感電させた。僕が床に着地すると、ドリグランはブルブルと痙攣しているが動く気配はなかった。
　コルーパも、瞬時に犬の姿に戻り、体に電気を帯びせて黒い液体にぶつかった。液体は元の人のようなドリグランの形に戻り、動かなくなった。
「あんた、誰？」
　僕は魚宇宙人に尋ねた。
「タウチーだ」代わりにコルーパが答えた。「なんで監視されてたんだ」
「私は用無しのようだ」タウチーが答える。「惑星併合に同意し、署名を済ませドリグランを開発したとたん、私は拘束されドリグランに監視されていた」
「あんたがドリグランに命令を出してたんじゃないの？」
「違う」タウチーは僕の質問にすぐに答えた。「もとはその予定だった。いつの間にか、命令は聞かなくなり、さらには通信を遮断し独立して動き出すものもいた。我々はジャックポントと呼ぶ。ドグラクスの古い言葉で、恐怖を表すんだ」
「そいつはどこにいるんだ」
「バンバルジの側近の誰かだ」タウチーは声を低くして言った。「バンバルジは命令を出さずにドリグラン自体に考えさせる事で行動を早くしようとした」
　コルーパが僕を見る。だが、目は暗く沈んでいる。
「お前達にもう一つ言わなきゃいけない」タウチーが指を一本立てた。「バンバルジは直に地球人奴隷化計画を開始する。大量のドリグランが送り込まれ、地球は文化を失うと同時に死ぬ」
　奴隷化計画という言葉に、母さんと父さんや、学校の元クラスメイトの顔が浮かぶ。
「私は生きていても何の価値もない。奴を止められない」タウチーが悲しそうにいった。「お前達を地球に送り返そう」

「どうやって？」
「転送装置がある」
タウチーが指を指したその先には、巨大なカプセルのようなものがあった。
僕らはそのカプセルに入った。
タウチーが機械をごちゃごちゃといじった後、カプセルのふたを閉めた。その時、部屋のドアが開いて、たくさんの銃を持ったサイザンフ星人が現れた。
「宇宙外交官および、宇宙外交官補佐確認。最高司令官タウチーも確認した」
中央のサイザンフ星人が、頭につけたマイクに言う。その次にマイクの向こうから聞こえた小さな声は聞き取れた。
『射殺しろ』
「了解」
サイザンフ星人が一斉に銃を構えた。スパン！　という鋭い銃声がなった。カプセルのふたは崩れ、背中から銃撃を受けたタウチーは倒れた。体が転送ボタンにのしかかり、ボタンが押された。
僕たちは地球に送り返されたのだ。

破壊と裏切り？（後書き）

かなりだれております。
テスト週間で執筆活動を中止していたので、そろそろ続きを書いていこうと思います。

ＴＯＫＵＧＡＷＡそろそろ解禁

破壊と裏切り？

僕たちは道路の真ん中に出現した。転送されるとき、体中がムズムズして変な感じだったけど、こういうものなのか、というのが小さい頃から描いていた転送装置の感想だった。それよりも――と僕は周りを見る。

「みんなどこへいったんだ……」

街はもぬけの殻だった。それどころか、破壊し尽くされた街とは思えぬほど静かだ。

「みんな、奴隷にされまいと逃げたのかもしれない」

コルーパが道路に落ちていた写真を見ながら言う。

「早く見つけなきゃ。スタンガンの支給準備もできてる」

「スタンガン？」

コルーパが不思議そうな顔で聞き返してきた。

「ドリグラン対策だよ。電気で機能が一時的に停止するなら、スタンガンがあった方が便利だろ？　それさえ持っておけば、ドリグランに拘束される心配はない」

なるほど。コルーパは納得したように頷いた。

「この近辺での生命反応を探ってくれ。、もちろん、地球人の」

「わかった」

そういうと、コルーパは座って黙ってしまった。

さて、コルーパが生命反応を確認している間に考えなきゃいけない事がある。それは、どうやって世界中の人たちにスタンガンを配るか、だ。考えつかなければ、ドリグランをここに集中させる方法を考えなきゃいけない。世界中のドリグランをここにおびき寄せて、被害を最小限に抑える必要がある。

「確認できた。最も大きい集団は地下だ。あそこのビルの地下」

といって、斜め向こうのビルを顎で指した。

「地下？　なんで、そんなところに」

「先の戦いを受けて、企業でも地下シェルターを作ったんだ。もちろん、サイザンフ星人も宇宙人だからばれないようにこっそりとね。だから安全だったわけだ」
へぇ。とりあえず、その人達にスタンガンを配らないと。
僕らはボロボロになったビルに入っていった。なかのソファーや窓ガラス、エレベーターはぐちゃぐちゃになっていた。
「で、どうやって地下に行くだ」
「そうだな。壊すのが手っ取り早いが、いざというときに壊れていると困るだろう。手分けして入り口らしいところを探そう」
わかったと頷くと、僕は受付を覗いてみた。そこは比較的きれいだったが何もなかった。いや、何かカードのようなものが落ちている。拾ってみると、それは社員ＩＤだった。僕はＩＤをポケットにしまうと、受付の床にたまっている埃をはらった。
「おい、コルーパ」
僕はコルーパを呼ぶと、受付の床を叩いた。カンカン！　という音がする。だが……。
「ちょっと聞いてくれ」
入り口付近の床を叩くと、コンコン！　という音がした。他の場所も叩いて見たけど、受付の裏だけが、カンカン！　という音がする。
「ここだな」コルーパが床を見下ろして言う。「だが、どうやってあけるんだ？」
「そうだな……」
僕は床をもう一度よく見た。受付のカウンターのすぐ横で、これといって開けれるようなところはない。僕はカウンターの裏を見る。そこには、カードをいれるようなスリットがあった。もしかしたら。と僕はポケットからＩＤを取り出すとスリットに差し込んだ。
ピピッという音と共に床が持ち上がった。
「正解だな」コルーパが満足そうに微笑む。「中の人たちに刺激を与えないようにするんだ」

床の下にはハシゴがあって、僕らはそこからゆっくり降りた。といっても、僕はコルーパを抱きかかえながら降りないといけなかったけれど。
ハシゴを下りた先に廊下があって、さらにその奥には扉があった。扉にはドアホンがついていた。僕がボタンを押すと、ピンポーンという音が響いた。中からは何も聞こえない。もっとも、聞こえるようではシェルターとして役に立たないが。
しばらくして、ようやく声が聞こえた。
『どちらさまでしょうか』
若い男の声だった。
「僕は地球人の空野天馬と言います。お話があってこちらにきました」
しばらくの沈黙の後、
『どうぞ、お入りください』
という声が聞こえて、ドアが開いた。
ドアの向こうは鉄の部屋だった。とても大きく、食料、水も見えた。その鉄の部屋に五十人ほどが入っていた。
部屋に入ると、スーツ姿の男が、こちらですと案内してくれた。僕らはそこに座ると、さっそく男は話を切り出した。
「それで、お話とはなんでしょうか」
「ええ。僕たちは敵に対抗するための武器を持ってきました」
周りから、歓喜の声が上がった。
「その武器とはなんですか」
「敵の生物兵器に有効なスタンガンです。それを使えば一時的に機能が停止します」
「それは、生物兵器のみですか？」
「いや、もちろん普通のサイザンフ星人にも有効です」
部屋にいた全員が安堵のため息をもらした。
「それはどこに？」
「今から出します」

今から？　と男が不思議そうに首をかしげる横で、僕は手のひらをしたにして石の力を使った。床が青く光ると、大量のスタンガンがわき出てきた。それを見ていた人たちは、あんぐりと口を開けていた。
「食料は足りてます？」
「ええ、まあ」
信じられないという顔で男は僕を見ている。
「水も？」
「大丈夫です」
「じゃあ、僕たちは行きますね。上の入り口の所にスタンガンで満たしておきますから、生存者にあったら渡してください」
僕らは、部屋から出て行った。ドアが閉まる前にコルーパが
「みなさんお元気で」
なんて言うもんだから、部屋の中からは悲鳴に似た声が響いた。
ハシゴを登り、床を元に戻すと、僕はさっそくスタンガンをフロアいっぱいに満たした。
「天馬、こい」
コルーパが小声で僕を呼んだ。外を見ると、サイザンフ星人が銃を構えて歩いていた。
「あいつからどこで会議をやるのか聞き出さないと。荒っぽい手でもいい、行ってきてくれ」
「わかった」
僕は、瞬時にサイザンフ星人の後ろに移動すると、首を叩いて気絶させた。道路の真ん中だと目立つから、ビルの中に引きずっていった。
サイザンフ星人の耳に指を当てると、石の力を使って記憶を引き抜いた。
その瞬間、いろんな映像が流れた。
今からそう時間が経っていない。バンバルジが、サイザンフ星人達に各惑星の代表者をサイザンフ星の宇宙会議塔に呼べと命令して

いる。バンバルジが船に乗り込んだ。その後を黒い液体がついていった。あれが、ジャックポントというバンバルジの側近だろう。
そこで映像は途切れた。
「コルーパ、サイザンフ星の宇宙会議塔だ」
「今行けば間に合うな。船を奪うぞ」
僕らは体を低くして、ビルとビルの間を往復しながら、サイザンフ星人の船に近づいた。船の裏に隠れると、作戦を練った。
「天馬はできるだけ奴らの注意を引きつけてくれ。その間に俺は操縦室を占拠する」
僕は頷くと同時に、船の前に瞬間移動した。すると、サイザンフ星人が僕に銃を向けた。後ろをちらりと確認すると、コルーパが液体化して船の中に入っていった。
スパン！　鋭い音がした瞬間、僕はジャンプして、弾を避けた。空中で一回転し、サイザンフ星人の顔の上に着地し、石の力を使って他のサイザンフ星人の足下を爆破させた。
そのころ、船の中からボロボロになったサイザンフ星人が出てきた。
入れ替わりに僕は締まりかけているドアにジャンプして船内に入った。操縦室に向かうと、見知らぬ男が操縦していた。
「誰だ！」
「俺だよ」
コルーパの声で男は答えた。
「犬や液体の状態じゃ操縦できないだろ」
船はいよいよ加速して、大気圏をあっという間に突破して宇宙空間にでた。
「こっからは二時間弱だ。寝ていけ」
「そうするよ」
とてつもなく眠い。一日にいろんな事がありすぎて疲れもピークだ。
気がついたら僕は眠っていた。

破壊と裏切り？（後書き）

もう、気力が無いのがおわかりですかね。。。
最近やること多いし、疲れてるし、
なかなかかけてないのが現状です。
がんばります。

最後の抵抗？

目が覚めたのはちょうどサイザンフ星についたときだった。見た事もないくらいの高さのビルが、降り立つ場所がないくらいひしめき合っている。見ると、どこもかしこも宇宙船が飛んでいて、未来に来たような気分だった。優に六百メートルを超えているであろうビル、いや、タワーの間をすり抜け、さらに比べものにならないくらいの高さ、大きさのタワーに向かっていった。

そのタワーは飛び抜けてでかく、その辺のタワーの四倍ほどの太さ、高さだ。

「あれは？」

僕は巨大なタワーについて訊いた。

「あれが、宇宙会議塔だ。この辺の惑星の中じゃ飛び抜けてでかい塔だ」

人型のコルーパは操縦しながら答えた。

宇宙船は、タワーとタワーの間をすり抜け、徐々に高度を上げていった。そのまま宇宙会議塔の真ん中当たりにある滑走路に止まった。そこにはたくさんの宇宙船が並んでいて、どの船からも見知らぬ宇宙人が降りてきている。

宇宙人達は滑走路から建物の中に入っていった。僕とコルーパもその後についていった。

人型のコルーパが僕の後をついてきたので、小声で訊ねた。

「どうして犬に戻らない」

「ここはペット禁止だ」

そういうと、僕を追い越して、タワーの中に入っていった。

入り口を抜けると、絨毯がひかれた廊下があった。そこを通り抜け、突き当たりの扉を開けるととてつもなく広いホールに出た。東京ドームとかそんなレベルじゃないほどの広さだ。上を見上げると、

東京タワーが余裕で入りそうな高さがあった。壁側には大きな円形のものがくっついていて、みんなその中に入っていった。
「あの丸っこいのはなに？」
「あれが席になっている。簡易食や飲み物などが備わっていて、あそこから会議に参加する」
「へぇ」
まるで小さい頃に見たＳＦ映画だ。
ホールの入り口の横には受付があって、どの宇宙人もそこで受付を済ましていた。ちょうど、前の宇宙人が受付をし終わって、僕の番が来た。
「惑星はどこです？」
「地球です」
僕が答えると、受付のサイザンフ星人が眉をつり上げた。
「太陽系第三番惑星の地球です」
コルーパが横から答えた。
「地球！」
コルーパの言葉を聞いて、受付のサイザンフ星人が驚きの声を上げた。その声がホールに響いて、一気に静まりかえった。
え？　状況がいまいちつかめない僕はキョロキョロと周りを見た。
みんな、僕とコルーパを指さしたり、ヒソヒソと話している。「地球だぞ……」といった、驚きの声が聞こえる。
「な、七百八十八の席です」
受付のサイザンフ星人が僕にカードを渡してくれた。
僕とコルーパは、さまざまな宇宙人の視線を受けながら七百八十八の席へ移動した。席は球体で、入り口にはスリットがついていて、僕はさっき渡されたカードを差し込んだ。
球体の入り口が開いて、僕の部屋くらいの大きさの球体に入った。
ようやく椅子に座ると、僕は犬の姿に戻ったコルーパに訊いた。
「なんでみんな驚くんだろう？」
「そりゃあ、地球は壊滅的な被害を受けているからな。それにサイ

ザンフ星人の奴隷になりかけているんだ。驚かないはずがない」
　コルーパが話し終えたとき、コンコンと何かを叩く音が聞こえた。後ろを振り向くと、球体の入り口を頭が尖った宇宙人が球体を叩いていた。
　僕は入り口を開けてあげた。
「地球の方がいらしていると聞いたので」と頭が尖った宇宙人は息を切らしながらいった。「私はセルロア星の代表者ゲンシャと申します。地球人の代表者にお話が」たっぷりと髭をたくわえたゲンシャはいかにもやり手の政治家だ、と僕は感じた。
　僕は様々な宇宙人が行き交う外を見回した。
「ここじゃ、話しにくいと思いますので、どうぞ中に」
　僕はゲンシャと中に入れると、さっそく彼は話を切り出した。
「この条約書類にサインをしていただきたく参りました」
　唐突に切り出された内容に戸惑った僕は、なんて返したらいいのか分からず、何も言えなかった。
「どんな条約です？」
　コルーパがゲンシャに訊いた。
「ええ。同じ志を持つ者の連合に加盟していただきい」
「連合？」僕は思わず聞き返した。「帝国ができてしまったというのに、なんの役に立つんですか」
「帝国ができてしまったからなのです」とゲンシャは言った。「武力では奴らには適わない。とすると、どうすればこの状況を打開できるのか。そして我々は思いついたのです。全ての資源の輸送をストップし、帝国を孤立させようと」
「でも、僕たちが奴らの手の中にいるんだったら、意味がないでしょう？」
「ですから、是非とも連合に加盟していただきたい。我々は微力ながらも兵を地球に配備し、奴らに徹底的に抵抗する。武力では適わないとわかったからです」
「いや、しかし――」

「時間がないのです」ゲンシャは焦っていた。「ここでこれを公言しておけば、地球が自分の手から離れると思って焦るでしょう」
「そうすれば、奴らは武力を持って制覇してきます」コルーパが口を挟んだ。「これ以上犠牲を出すのは利口ではないと思うのですが」
「我が連合の加盟惑星は二百二十。対するは二つ。もし、武力衝突が起こったとしても勝てぬ訳がないと思うのですが」
「でも、ドリグランは？」二百十という言葉に勝てるかも知れないと思った僕は、心配になって訊いた。「あの兵器の強さは別格です」
「所詮兵器。サイザンフの総本陣を崩してしまえば、奴らもただのゴミの塊。問題は――」
「ジャックポントですね」コルーパが言った。
「ご存じでしたか。タウチーが、極秘回線を使って各惑星にその情報を漏らしたとか……」そういうとゲンシャは優しい顔になって言った。「そこはほら、こちらの最終兵器に任せますよ」
ゲンシャは僕の方を叩いた。
「連合に加盟しましょう」
コルーパはそういうと、書類を受け取った。僕は、石の力でペンを出すと、ＵＮＦＳ（宇宙非武力連合）と書かれた書類にサインした。
「では、会議でバンバルジを攻め立てましょう」
書類を持って立ち上がると、ニコりと笑ってゲンシャは出て行った。
ブーンと、懐かしい音がしたな、と思ったら、球体の外、ホールの空中に僕たちと同じ球体が浮かんでいた。その球体の中にバンバルジが現れた。
「第一回、ナハルタ帝国会議を始める」バンバルジの声が響いた。
「僕はどうすればいい？」いよいよ会議が始まろうという時に僕は訊いた。
「味方は大勢いる。ナハルタ帝国を孤立させる事が最善の策だ」
空中に浮かぶ球体がパカリと開いた。球体からものすごい勢いで

黒い物体が飛び出した。その物体は真上に向かって伸びると、花が開花する様に横に広がった。そこからバンバルジが現れた。左右にはドリグランが二体いる。
「ちょっくら行ってくる」唐突にコルーパは立ち上がった。
「こんな大事なときにどこ行くんだよ」
「会議は連合のみんなに任せておけばいい。それよりも、地球を助けるのが先決だろ」
「じゃあ僕も行くよ」立ち上がろうとした僕に、コルーパは鋭い声を発した。
「だめだ」
「なんで」納得がいかない僕は食い下がる。「コルーパだけじゃ危険だ。ここは敵地だぞ」
「俺はドリグラン初号機だぞ。大丈夫だ。それよりも――」コルーパはバンバルジの両脇にいるドリグランを見る。「あの二つのどっちかがジャックポントだ。気をつけろよ」
「わかった。気をつけろよ」
ああ、とコルーパは頷くと、消えた。瞬間移動でもしたのだろう。
「宇宙条例四十三箇条により、地球は武力制圧、代表者不在によってサイザンフ星所有物となった。また――」
「異議あり」僕はマイクに向かっていった。
バンバルジがさっと僕の方を向いた。顔が青ざめるのが分かった。
「地球宇宙条約第三箇条『地球の代表者がいない場合、宇宙外交官を公にし、代表者代行とする』。代表者代行として僕は惑星占有所有物法第十二条に違反するとし、サイザンフ星代表者に意義を申し立てる」
「地球宇宙条約第三箇条は地球に正式な代表者ができる以前の条約だ。しかし、今は地球には世界政府がある」バンバルジが反論した。どうやら、地球がここにいては困るらしい。自分たちの力を見せつけれないとでも思っているのだろうか。
「現在、地球に代表者がいない場合、宇宙外交官を代行とすること

ができる条約と見受けられるが？」向かい側でゲンシャがいった。
「しかし――」
「問題は地球の代表者ではないと思うのですが」遠くの方から声が聞こえる。どうやら、仲間のようだ。「さっさと本題に入りましょう」
しばらくの沈黙の後、マイクのノイズ音が入った。バンバルジは咳払いを一つすると、話し始めた。
「我々ナハルタ帝国は、宇宙武力公約に基づき、武力による惑星を私有する。よって地球はナハルタ帝国となる」
「異議あり」ボクは異議を唱えた。「宇宙武力公約によると、正当な交戦宣言が無ければ武力によって惑星を私有したとは言えないはずです」
「そうだ！　あれは不当な奇襲だった！」他の席から声が上がる。
続いて、他の席からも講義が上がった。
「静かに！」バンバルジが声を張り上げた。「我々の力であなた方の星を占拠することもできるのですぞ？」
「それでは議会の意味がなくなる！」
「では議会を無くせばいい！」バンバルジが嘲笑した。「今の宇宙では議会など形式張った物でなんの意味も持っていない。ならば無くしてしまおうではありませんか」
「それはまるで、ナハルタ帝国がリーダーと行っているような物ではありませんか」
「異論は認めませぬぞ」バンバルジが片手をあげた。それと同時に左右のドリグランが構える。
「それは脅迫だ！」僕は思わず声を上げた。
「どうやら、会議の意味は無いようです」ゲンシャがいう。「我々『宇宙非武力連合』は武力による制圧を認めない。あなたを拘束します」
ダン！　と言う音と共に壁に穴が空き、あっという間に兵が内部を埋め尽くした。

「今ここに」バンバルジが静かに声を放った。「今ここに、宇宙非武力連合への攻撃を宣言する」

最後の抵抗？（後書き）

終盤です。
本当は会議の内容を濃くしたかったのですが、ペラペラになりました。。。

最近忙しいので、ＴＯＫＵＧＡＷＡがなかなかかけず、投稿が延期になりそうです。

最後の抵抗？

バンバルジの周りに大量のドリグランが現れ、縦横無尽に飛び散った。席は全て破壊され、各惑星代表者は転送装置で自分たちの星へ帰って行った。

バンバルジの右側にいたドリグランがすさまじいスピードで僕の席へ向かってきた。瞬く間に破壊され、僕は席と一緒に落下していった。

ヒュオオ、という音が耳を切り、ドリグランと一緒に塔の下に落ちていった。僕とドリグランはつかみ合いながら、離れたり、近づいたりしていた。くるくると落ちて、どっちが上か下かなんてまったくわからなくなったとき、ふっとドリグランが消えた。と思っていたら、僕はそのまま地面に激突し、上から迫り来るドリグランに押しつぶされた。

すさまじい衝撃で、地面は波のように浮き上がり、砂煙が塔の中に充満した。

ドリグランは僕を掴みあげて、投げた。僕は力なく、されるがままに飛ばされ、塔の壁を突き破った。背中と腕を激しい痛みが襲う。

コロコロと転がった、僕の前にドリグランは立ちはだかった。

「地球人には奴隷がふさわしい」

ドリグランが嘲笑した。

「ジャックポットか」

「貴様の質問に答える許可は下りていない」

そのドリグランが、僕を掴もうとしたとき、遥か頭上から、人型の何かが落ちてきた。その何かはドリグランに衝突した。

その後、次々とドリグランが降り注いでくる。僕はかろうじて避けると、よろよろと立ち上がった。すると、どこからともなくコルーパが現れた。

「ドリグランの機能を停止した。動いてるって言う事は、ジャック

ポントだな」
「フン」
ジャックポントは鼻で笑うと、液体化して、地面の中に潜り込んだ。
「天馬、お前はバンバルジを捕まえに行け。奴は塔の最上階の発着場に向かってる」
コルーパが言った。
「じゃあ、コルーパはどうするんだよ」
「こいつと決着をつけるさ」
そういったとたん、地面が大きく割れ、中から出てきた針の様な黒い物体に、コルーパは突き飛ばされた。コルーパは猫のように着地した。
「いいから早く行け！」
僕は大きく上下する地面の上を飛びながら、塔の中に入った。ふと後ろを振り返ると、白と黒の液体が入り乱れて、激しく、絶え間なく移動している。僕は、石の力を使って塔の上に向かった。ちょうど真ん中当たりまで来たとき、壁を突き破って黒い液体が入り込んできた。黒い液体はクルクルと回転しながら僕を狙ってくる。
黒い液体が僕の足下に迫ってきたとき、真横から塔の壁を破って白い液体が入ってきて黒い液体とぶつかった。黒い液体は、コルーパに邪魔されてもなお僕を狙ってくる。白い液体をするりと避け、僕の真下まで来ている。そこに白い液体が交わり、クルクルと回転する白黒の液体となった。
「天馬、急げ！」
白い液体から声がした。そういわれても、この速さが限界なんだ。
あと少しと言うところで白い液体は塔の下に落ちていった。
「コルーパ！」
僕は思わず止まってしまった。次の瞬間、下から来たジャックポントに突き飛ばされた。発着場に倒れた僕は、横目に、宇宙船に乗ろうとするバンバルジを見た。

「待て！」
立ち上がろうとすると、ジャックポントが上にのしかかって来た。動けなくなった僕は、ジャックポントの顔を殴った。石の力を使って、渾身の力を振り絞った一発だったのに、ジャックポントはびくともしない。
ジャックポントは僕の体に乗ったまま、右手を振り上げた。顔を右にそらし、なんとか重たい一撃をかわした。それと同時に、石の力を使って体を跳ね上げ、ジャックポントを吹き飛ばした。
すぐさまに僕は立ち上がり、石の力で宇宙船を吹き飛ばした。
バンバルジは驚いた顔でこっちを見る。
「もう終わりだ、バンバルジ」
「まだ終わってない！これが始まりなんだ！」
視界の外から飛びかかってきたジャックポントと一緒に、僕は塔の下に落下した。
頭から落ちていく中で、ジャックポントを蹴り上げた。
僕とジャックポントが離れたとき、下から白い液体が上がってきた。液体は、変形してジャックポントと同じ姿になると、手を剣に変形させてジャックポントに切りかかった。ジャックポントはそれを素手で受け止めると、コルーパの片手を掴んだまま、体を引き寄せて膝蹴りをした。一度だけでは飽きたらず、何回も何回も繰り返していた。
「やめろ！」

最後の抵抗？（後書き）

更新が遅れました。
夏休みになって、ようやくかける！
と思ってたんですが、補習やらで忙しく、
先が見えないまま行き当たりばったりで書いている状況なので文がぐちゃぐちゃです。
こんなものでも、読んでいただけたら嬉しい限りです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7810t/

喋る犬と宇宙外交官２nd

2011年7月29日03時30分発行